

# 豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けた生徒の育成

— 「理解する力」「表現する力」「伝え合う力」を育成する活動を通して—

牧 俊 輔 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

山 内 誠 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

東 佑 樹 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

永峯枝理子 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

山 口 祐 介 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

Fostering students who have acquired the qualities and abilities to promote rich communication:

Activities fostering the ability to understand, express, and communicate

MAKI Shunsuke, YAMAUCHI Makoto, HIGASHI Yuki, NAGAMINE Eriko and YAMAGUCHI Yusuke

キーワード：発問の工夫、要約指導、コミュニケーション、プレゼンテーション、外部人材

## 1. 研究仮説

社会や世界、他者との関わりに注目させたり、資料やデータを活用させたりしながら、コミュニケーションを図ることができるための手立てを工夫し、英語での言語活動を実践すれば、豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けた生徒を育成することができる。

## 2. 研究主題並びに仮説設定について

### 2.1. 時代の要請から

中学校学習指導要領外国語編（2017年7月）において、外国語科の目標は「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の五つの領域で設定されている。その背景には、「やり取り」、「即興性」を意識した言語活動が十分になされていないこと、読んだことについて意見を述べ合う等の複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことが課題として挙げられる。このことから、外国語の指導において、他者との関わりを意識した統合的な言語活動に取り組ませる必要があると考える。

また、Society5.0時代に生きる子供たち一人ひとりが予測不可能な未来社会を自律的に生き、社会形成に参画するために資質・能力を身に付ける必要性が高まっている。これからの時代を生きる子供たちは、人間の強みを発揮し、これらの技術を使いこなす力が求められる。学校教育には、そうした力を身に付けさせることも求められていると考える。

## 2.2. 生徒の実態から

本校では、平成23年度から平成29年度まで『創造的な学び』について研究・実践してきた。英語科では、「創造的に考える力」と「創造的に考える態度」の二つを兼ね合わせた「円滑なコミュニケーション能力」を育成するために、「手がかりを見いだす活動」、「考えを拡げる活動」、「よりよいものへまとめる活動」という三つの活動を統合的に取り入れ、単元構成や授業設計、各言語活動の工夫を行った。また、自ら課題を設定し、その解決に向けて実践を繰り返させることで能動性を発揮させたり、コンセンサスサークルを用いた言語活動を通して、新たなアイデアを取り入れて課題の解決を図らせることで独自性を発揮させたりする手だてを行った。さらに、「円滑なコミュニケーション能力」を高めるために、複数の生徒にそれぞれ役割と責任感を持たせた上で、よりよい考えや意見を生み出す「協働的な言語活動」として、ジグソー学習を取り入れた。

これらの研究実践により、多くの成果を得る一方で、次のような課題が見られた。

- ・ 「話すこと」の指導において、教師と生徒とのインタラクションの中では、生徒が誤った表現を用いる場面があった。教師は、生徒にその誤りに気付かせながら修正を行ったが、間違いを恐れて「話すこと」に消極的になる生徒、話し手の考えをうまく汲み取れない生徒等が見られた。
- ・ 相手に同調、共感、傾聴したりすることで活発な言語活動を行うことができたが、協働を意識しすぎるあまり、批判的な意見に対して自分の考えや気持ちを表現することに不安や苦手意識をもつ生徒の姿があった。

これまで述べてきたことを踏まえ、本校英語科では、AIの普及や更なる技術革新を見据え、生徒たちが人間としての強みを発揮しながら、これまでに習得してきた知識や技能・経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちを適切に表現することができる力を身に付けさせたいと考えた。また、その過程において、自分の考えや気持ちを、自信をもって伝えようとする態度を育みたいと考えた。そのためには、英語による協働的な言語活動を重視しながらも、伝えたいことが受け手に届くように資料やデータを用いることで内容を補強させたり、外部人材を活用して学習した語彙や表現等を実際に使用する場を設定したりする等の指導の工夫が必要である。これは、本校の研究主題として掲げている「新たな時代を豊かに生きる生徒」の育成にもつながると考える。

以上のことから、本校英語科では、研究主題を「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けた生徒の育成」と設定し、「社会や世界、他者との関わりに注目したコミュニケーションを図りながら、資料やデータを活用した英語での言語活動を実践すれば、新たな時代を豊かに生きる生徒を育成することができる」との仮説を立てた。

### 3. 研究の構想

#### 3.1. 「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力」を育成するために

##### 3.1.1 「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力」とは

中学校学習指導要領外国語編では、外国語の音声や文字を使ってコミュニケーションを図る資質・能力を、「表現する」、「理解する」、「伝え合う」という三つの要素に整理している。それらを、受け手としての「理解する力」、伝え手としての「表現する力」、そして双方に関わる「伝え合う力」のように、力として捉えたのが、下の表1である。

本校英語科では、これらの三つの力の育成を図るとともに、英語学習における知識や技能・経験に加え、必要に応じて資料やデータ等を用いながら、関心のある事柄や日常的な話題、社会的な話題について、世界の人々と互いの考えや気持ち等を伝え合うことで、これまで以上に豊かなコミュニケーションを図ることができると考えた。このような力の総称を、本校英語科では「豊かなコミュニケーションを図るために必要な力」とした。

また、外国語で表現し伝え合うためには、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉えることや、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けていることも重要であると考えた。そのために、多様な人々との対話といった実際のコミュニケーションの場面において自らの知識や技能・経験を活用し、考えを形成・進化させ、話したり書いたりして表現することを繰り返すことで、生徒に自信をもたせることが必要であると考えた。このような態度を、本校英語科では「豊かなコミュニケーションを図ろうとする態度」とした。

このことから、「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力」を構成する要素を次のように整理することができる。

- ・ 豊かなコミュニケーションを図るために必要な力
- ・ 豊かなコミュニケーションを図ろうとする態度

表1 外国語でコミュニケーションを図るための資質・能力として整理される三つの力

<p>「理解する力」 英語を用いて「聞くこと」「読むこと」の活動を通して、伝え手の考えや気持ちを受け取り、その主旨を把握・理解することで、自らの考えや行動に重ね合わせることができる力。</p>
<p>「表現する力」 英語を用いて「話すこと [発表・やり取り]」「書くこと」の活動を通して、自分の考えや思いを他者に伝えることで、受け手に心的な変化を促し、考えや行動を生み出させることができる力。</p>
<p>「伝え合う力」 自分の意思決定のために、英語で「聞くこと」「読むこと」を通して理解したことや自身の考え、知識・技能や経験を基に、英語で「話すこと」「書くこと」によって、互いに事実や意見、気持ち等を伝え合ったりすることができる力。</p>

### 3.1.2 豊かなコミュニケーションを図るために必要な力や態度を育成するために

本校英語科では、これまで「円滑なコミュニケーション能力」を高めるために、『創造的な学び』を実践してきた。実際に英語で情報を伝えたり、互いの考えや気持ちを表現したりする言語活動をタスクとし、毎時に行う small task と単元を貫く large task, large task の準備段階として設定される middle task の3種類を開発し、実践を重ねた。それぞれのタスクを解決するために、能動性や独自性を発揮させる指導の工夫や、協働的な言語活動を取り入れてきた。しかし、習得した知識や技能・経験を実際のコミュニケーションの場で発揮する機会が少ない。

そこで、これまで以上に実践的なコミュニケーションを見据えた言語活動を行う必要がある。そのために、本校の姉妹校である国立台北教育大学の実習生や台北市立大直高級中学の生徒たちとの交流の場を、言語活動に効果的に取り入れる。これにより、社会や世界、他者との関わりを意識した実践的なタスクとなり、生徒はコミュニケーションに対して目的を見いだしながら、自分の考えや気持ちを伝えるために積極的に学習に取り組むと考える。

また、プレゼンテーションを実践するタスク設定も効果的であると考え。テーマに沿って情報を整理しながら考え等を形成して再構築したり、受け手に配慮した表現方法を用いたりすることは、「理解する力」や「表現する力」を高めることにつながる。必要に応じて、資料やデータの活用、ジェスチャー等の非言語表現の使用により、伝え手と受け手双方の「伝え合う力」も育まれる。結果として、生徒は豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けることができると考える。

## 4. 研究の重点

- ・ 「読み解き対話する活動」、「思考・吟味する活動」、「価値を見つけ・生み出す活動」を充実させるための指導の工夫
- ・ 授業デザインの工夫
- ・ 外部人材の活用の工夫

## 5. 研究の内容

- 5.1. 「読み解き対話する活動」、「思考・吟味する活動」、「価値を見つけ・生み出す活動」を充実させるための指導の工夫

表2 本校の学校教育目標

学校教育目標	
豊かな感性と人格を磨きながら、真理を求めて意欲的に学び、主体的・協働的に活動していく生徒を育成する。	
知識及び技能	物事の本質を深く追究したり、よりよく自己を生かして協働したりするための知識・技能を身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	目標に向かって知識・技能を効果的に活用し、よりよいものをつくり上げるための必要な力を養う。
学びに向かう力、人間性等	自分と他者の理解を深め、よりよいものをつくり上げ、豊かな自尊感情ならびに他者を大切にする深い感情を育み、社会に積極的に参画していく態度を養う。

表3 本校外国語科の目標

知識及び技能	外国語の特徴・きまり・働きを理解し、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。
思考力, 判断力, 表現力等	目的や場面, 状況等に応じて, 外国語の情報を選択したり, 抽出したりして, よりよい意見や考えを, 実際に外国語で表現する力を養う。
学びに向かう力, 人間性等	外国語の背景にある文化に対する理解を深め, 他者に配慮しながら, 主体的に外国語でコミュニケーションを図る態度を養う。

本校外国語科では、表2の学校教育目標を達成するために、教科として育むべき資質・能力を三つの柱で表3のように捉えた。

知識及び技能においては、学校教育目標に示される「本質の追究や協働のための知識・技能」を、学習指導要領解説外国語編の内容を踏まえ「外国語の特徴・きまり・働きの理解」と捉えた。また、「よりよく自己を生かして協働」できる生徒を育成するために、平成27年度に本校で研究・実践した「知的コミュニケーションの活性化を図る協働的な言語活動」を継続して行うことで、「実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能」の育成を目指す。協働の経験を積み重ねさせながら、自分の考えや気持ちを外国語で伝え合うために必要な知識・技能を身に付けさせることは、学校教育目標のねらいにつながるものと考えている。

思考力, 判断力, 表現力等においては、学校教育目標にある「目的に向かって知識・技能を効果的に活用」を、「目的や場面, 状況等に応じて, よりよい意見や考えを, 実際に外国語で表現」と捉え、そして「よりよいものをつくり上げるために必要な力」を、「外国語の情報を選択したり, 抽出したり」する力と捉えた。つまり、外国語科においては、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせながら、実際に英語を用いた言語活動の中で思考・判断・表現することを繰り返させることで、生徒の思考力, 判断力, 表現力等の育成を図る。これにより、論理的な思考の形成と、本校生徒の課題である「英語を正確に書く力」の向上が期待できる。よって、学校教育目標のよりよいものをつくり上げる思考力, 判断力, 表現力等を身に付けることにつながると考える。

学びに向かう力, 人間性等について、「自分と他者の理解」は、外国語科の学習で身に付けさせるべき内容である「外国語の背景にある文化に対する理解」と共有できる部分である。また、「豊かな自尊感情並びに他者を大切にす深い感情」は、他者との共通点や相違点を理解させることを通して、「他者に配慮」できる態度を身に付けさせたいと考える。「社会に積極的に参画していく態度」に関しては、生徒の学習に粘り強く取り組む姿勢を生かしながら、社会的な話題を中心に据えた協働的な言語活動を取り入れることで、「主体的に外国語でコミュニケーションを図る態度」の育成を目指す。このような態度は、グローバル化が進むこれからの社会に参画していく態度を養うことにつながるものと考えている。

本校外国語科では、現代の社会情勢や本校の実態を踏まえ、「豊かなコミュニケーション」を「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら目的や場面、状況等に応じて知識及び技能を活用してよりよい意見や考えを伝達・交換すること」捉えた。

「豊かなコミュニケーション」を図る資質・能力を身に付けさせるためには、能動性や独自性を発揮させる指導の工夫や、英語による協働的な言語活動を重視しながらも、伝えたいことが受け手に届くように資料やデータを用いることで内容を補強させたり、外部人材を活用して学習した語彙や表現等を実際に活用する場を設定したりする指導の工夫が必要であると考えた。これらは、全体緒論でも述べられる Society5.0 で求められる「新たな時代を豊かに生きる生徒」の育成にもつながるものであると考えた。

そこで、本校外国語科では、「読み解き・対話する活動」、「思考・吟味する活動」、「価値を見つけ・生み出す活動」を以下のように設定した。

- ・ コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて外国語の情報を正確に理解したり、他者と対話したりしながら、自己の考えを広げ、深めるための活動
- ・ 問題（課題）を解決して得られた情報や知識及び技能を、協働的な言語活動を通して振り返り、自分の意見や考えをよりよくするための活動
- ・ 問題（課題）を解決して得られた作品や発表等を多面的・多角的に評価したり、それらを生かして新たな問題（課題）を見いだしたりするための活動

これらの三つの活動を実践することにより、超スマート社会と呼ばれる Society5.0 のような新たな時代においても、豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けた生徒を育成することができる考える。

これまで述べてきた本校の学校教育目標や本校英語科の目標を達成するための取組、本校生徒の実態と目指す生徒の姿を整理した本校外国語科のグランドデザインが表4である。

表4 本校外国語科のグランドデザイン

【何ができるようになるか】												
(1) 外国語の特徴・きまり・働きを理解し、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。 (2) 目的や場面、状況等に応じて、外国語の情報を選択したり、抽出したりして、よりよい意見や考えを、実際に外国語で表現する力を養う。 (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語でコミュニケーションを図る態度を養う。												
【生徒の実態】						【目指す生徒の姿】						
○ 英語によるプレゼンテーションやスキット等の「話すこと」の活動において、ジェスチャーや視覚媒体を用いながら表現豊かに発表する。 ○ 自分の考えや気持ちを多くの語句を用いて「書くこと」や、まとまりのある文章を深く「読むこと」に粘り強く取り組む。 ● 英語による即興的なやり取りでは、間違いを恐れ、全体の場で意見を述べることに消極的な様子がある。 ● 英語を「書くこと」において、正確性に課題がある。						・ 英語の特徴・きまり・働きを理解し、実際のコミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて活用できる技能を身に付けている。 ・ 自らの知識・技能及び経験を関連づけながら英語で理解したり、表現したり、伝え合ったりすることができている。 ・ 他者を配慮しながら、間違いを恐れることなく主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けている。						
【何を学ぶか】												
英語	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	①単元説明カード・Let's Start ②アメリカン・ドリーム	③アメリカからの移民生活 ④ウツリ先生がやってみた	⑤リサイクル活動	⑥国際フードフェスティバル		⑦日本のイギリス旅行	⑧The World Ocean	⑨Origami		⑩A New Year's Visit	⑪Mile's Visit to Washington, D.C.	
2年	⑫Did You Enjoy Your Vacation?	⑬A Trip to Finland	⑭What Can We Do for Others?	⑮Ego Riders		⑯Gulliver's Travels	⑰A Work Experience Program	⑱If You Wish to See a Change	⑲Friendship across Time and Borders		⑳A Video Project	㉑So Many Countries, So Many Customs. ㉒U - To Share Is to Live. ㉓Her Dream Came True.
3年	㉔A History of Vegetables	㉕Volcanoes in Japan	㉖The 3 Rs to Save the Earth	㉗Faithful Elephants		㉘South-to-Around in the World	㉙Let's Talk about Japanese Things.	㉚What is the Most Important Thing to You?	㉛Clean Energy Sources		㉜Education First: Malala's Story	
【実践するために何が必要か・どのように学ぶか】												
・ 事実発問、推論発問、評価発問の工夫 ・ 要約指導の工夫 ・ よりよいプレゼンテーションを目指した指導の工夫 ・ 外部人材の活用（台湾との交流／英語キャンペーンの実施／TOEFL Primary Step2 及び TOEFL Junior の活用）												

## 5.2. 具体的な取組

### 5.2.1 「読み解き・対話する活動」を充実させる指導の工夫

本校外国語科では、事実発問、推論発問、評価発問の更なる充実を行った。英語で読まれたり、書かれたりした文章や情報から、自分が必要とする情報や概要、要点を捉え、また文化一般を意識した異文化理解の観点をもたせることで、正しく理解する力を育ててきた。同時に、ペア活動では根拠を明確に示しながら、相手に伝えることができる表現力を養うための指導の工夫を図ってきた。特に、推論発問では、文章に明示されていない情報を補う精緻化推論発問を行うことで他者を意識した、「読み解き・対話する活動」の充実を図った。

### 5.2.2 「思考・吟味する活動」を充実させる指導の工夫

#### a 要約指導の工夫

本校外国語科では、要約指導の工夫を行ってきた。中高の連携を意識して、Generalizing, Paraphrasing 等の六つの項目に絞って指導を図ってきた。本研究では、より協働学習形態で学びに取り組みやすく、キーワード再生の基礎練習ともなるディクトグロス (dictogloss)

を導入した。ディクトグロスは、場面設定や登場人物等の確認を行う **Pre-listening** を十分に行った後に、CDによる本文リスニングにおいて、生徒がメモを書き取り、ペアでその内容を共有し、本文の再構築を行う。閉本状態で本文の内容を理解し、ペアで情報や意見を交換することで、「思考・吟味する活動」の充実につながっている。

#### b よりよいプレゼンテーションを目指した指導の工夫

単元終末時においてプレゼンテーションを実施することで、単元で学習した内容を受けた自分の意見を発信する場を設定した。よりよいプレゼンテーションを目指した指導においては、受け手を意識した **Visual Message** や **Physical Message** を効果的に活用する姿勢が見られるようになった。その中で、シナリオである **Story Message** に課題が見られたため、**S P S E** や **self-us-now**、またはその両方を活用して指導をすすめることでその充実を図った。

### 5.2.3 「価値を見付け・生み出す活動」を充実させる指導の工夫

#### a ルーブリックシートを用いた large task 設定の工夫

単元毎にルーブリックシートを作成し、**large task** を設定することで見通しをもった主体的な学習へと繋げている。しかし、生徒一人一人にとって多くの価値を含んだ学習課題にすることに課題が残っていた。そこで、学習の状況に応じて **large task** を生徒自らが設定したり、前単元を踏まえた自己課題を設定したりすることで学習内容に価値を見いだす態度の向上を図った。

#### b 外部人材の活用

豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を育むために、授業における言語活動の工夫に加え、生徒にとって実践的なコミュニケーションの機会、身に付けた知識や技能・経験を発揮する場として、外部人材を活用することが重要であると考えた。これにより、生徒は学びの目的を明確にするとともに、学びに向かう力を高めることができると考える。

本校では、9月第1週から2週間の日程で、国立台北教育大学から小学校教諭を志す教育実習生10人程度の受入を行っている。実習生による授業は、文法指導を含め、オールイングリッシュで展開される。本校の英語科職員が日頃行う授業の流れを実習生に事前に指導しておくことで、生徒は不安なく授業に参加することができる。また、実習生による発問や指示を集中して聞き取ろうとしたり、推測しながら理解しようとしたりする場面が増え、実践的コミュニケーションに必要な力を身に付けながら学習していく。また、**G T (Global Time 英語集会)**での異文化理解を目的とした英語での質疑応答、インタビュー、総合的な学習の時間において国際理解教育の一環とした台湾の文化紹介等も行った。すべての活動において、教師と実習生が入念な打合せを行い、目指す生徒の姿を共通理解しておくことが重要である。さらに、国際交流やプレゼンテーションの発表の場として、台北市立大直高級中学との交流

学習を行っている。例年、スカイプやスマートフォンの無料通話アプリを媒体としたプレゼンテーションや手紙のやりとりを行っている。それに加え、2019年度は本校の代表生徒5名を連れて、台湾研修視察を実施した。代表生徒は学校を訪問し、施設を見て回ったり、理科の授業を英語で通訳したりする活動を行った。また、2019年8月31日から9月1日の2日間にかけて、英語キャンペーンを実施した。これは、「中学生に英語を使う楽しさを知ってもらう」ことを目的としたものである。台北教育大学から教育実習生を含む16名の学生が本校を訪れ、生徒を対象に体育や家庭など技能を有する教科を英語で行いながら台湾の文化を学ぶ表現活動が実施された。本活動は、日頃の学習の成果を発揮する実践の場となった。

### c TOEFL Primary / Junior の活用

本校では生徒の英語力を把握するため、Global Communication and Testing が行っている TOEFL Primary / Junior を年2回教育課程に位置づけて実施している。生徒の英語運用能力を世界規準で測定し、生徒の学習意欲向上に加え、教師の指導法改善にも活用していく。

## 6. 研究の成果と課題（○は成果，●は課題）

- 本文音読後にディクトグロスによる教科書本文の再構築を行わせることで、本文の内容を生徒が知っている文法、語彙で表現するようになり、より分かりやすい文章を作成しようとする姿勢が見られるようになった。
- Physical message と Visual message を効果的に活用しながら、豊かなコミュニケーションを図ろうとする姿が見られるようになった。Story message として self-us-now を意識しながら書くことで、文量にとらわれず生徒自身が伝えたいことを書こうとする姿勢が多く見られるようになった。
- 推論発問は、外国語の背景にある文化に対する理解を促す発問である必要がある。そのため、文化的背景や他者意識の理解を促せるような発問が求められる。
- ディクトグロスでは、聞き取った内容について、メモを書き取らせる際に課題が残った。メモ作成における共通した方法を実践する必要がある。
- 外部人材を活用する機会において、生徒に自身をもって活動に取り組ませるためには、「話すこと [やり取り]」の力を伸ばしていく必要があると感じた。そのために、スピーキング等のパフォーマンステストの仕組みを整えることや、ライティングで正確性を高める指導を継続して行っていくことで、生徒が活動に自信をもって取り組めるようにしたい。

【参考文献】

- ・ David Harrington / Charles LeBeau (1996) : 『Speaking of – Basic Presentation Skills for Beginners』  
マクミラン ランゲージハウス
- ・ 門田修平, 野田忠司, 氏木道人 (2010) : 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店
- ・ 藤原久雄 (2013) : 『「人間形成のための学力」を育む授業—子どもが自ら学び続けるために—』明治図書
- ・ 新里眞男, 佐藤 寧, 高梨芳郎, 卯城祐司 ほか 31 名 (2016) : 『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1,2,3』  
開隆堂
- ・ 八幡紕芦史 (2016) : 『パーフェクトプレゼンテーション』アクセス・ビジネス・コンサルティング
- ・ 文部科学省 (2017) : 『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』
- ・ 文部科学省 (2018) : 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂
- ・ 文部科学省 (2018) : 『中学校学習指導要領 総則編』東山書房
- ・ 木村松雄 (2019) : 『新しい時代の英語科教育法』学文社
- ・ 土屋澄男・秋山朝康・大城賢・千葉克裕・望月正道 (2019) : 『最新英語科教育法入門』研究社